

285 低LH比hMG製剤による固定卵胞刺激法の体外受精・胚移植における臨床的有用性についての検討

東邦大第1

池永秀幸, 中野英之, 片桐由起子, 安部祐司, 間崎和夫, 森田峰人, 矢野義明, 久保春海, 平川 舜

〔目的〕我々の開発した7日間固定卵胞刺激法を用い、3種類の異なる比率でLHを含有するhMG製剤についてdose-responseの観点より、IVFにおける治療上の有用性を検討した。〔方法〕対象はIVF患者100人とし、ランダムに投与するhMG製剤を決め、FSH/LH比が1:1のhMG製剤を投与した30人を対照群(1:1群)とし、3:1の52人を3:1群、pure FSHの18人をFSH群とした。各群とも、前周期の黄体初期よりBuserelin 900 μ g/dayを連日鼻腔内投与し、消退出血後、採卵日を決め、逆算してその10日前より、hMG 300IUを7日間投与し、8日目に卵胞数(≥ 2)、卵胞径(≥ 16 mm)、子宮内膜厚(≥ 10 mm)、E2値(≥ 200 pg/ml/follicle)が基準値以上であることが確認された時、hCG 1万単位を筋注し、それ以下の症例はキャンセル周期とした。〔成績〕1) 採卵率(採卵数/発育卵胞数)は1:1群85.4%に対し、3:1群102.5%と有意に高く、FSH群 81.4%であった。2) 受精率は1:1群62.6%に対し、3:1群59.8%、FSH群60.3%、分割率は61.9%に対し、59.8%、58.8%、胚移植数は 3.0 ± 1.3 に対し、 3.0 ± 2.7 、 3.4 ± 2.9 、キャンセル率は24.8%に対し、25.6%、21.2%と各々有意差はなかったが、均等分割率(均等分割卵数/分割卵数)は1:1群49.7%に対し、3:1群68.5%と有意に高く、FSH群51.2%であった。3) 胚移植あたりの妊娠率は1:1群14.2%に対し、3:1群41.7%と有意に高く、FSH群5.6%であった。〔結論〕IVFにおいて7日間固定卵胞刺激法を用いた場合、本研究の3群のうち、FSH/LH比が3:1のhMG製剤が採卵率、均等分割率を向上させ、良好な妊娠率を得る上で最も効果的であることが示唆された。

286 正常妊娠及び胞状奇胎におけるG-CSF値の推移

宮崎医大

永井公洋, 安田 博, 池ノ上 克

〔目的〕近年胎盤組織におけるmacrophage colony-stimulating factor(M-CSF)のレベルが妊娠初期よりも後期に高いことやgranulocyte-macrophage(GM)-CSFが胎盤間質に存在することが報告されているが、G-CSFに関する報告は少なく、今回我々は正常妊娠及び胞状奇胎におけるG-CSF値を検討することを目的とした。

〔方法〕対象は妊娠8~13週(n=17)、妊娠29~32週前後(n=25)、人工妊娠中絶前(n=3)後(n=3)及び胞状奇胎娩出前(n=2)後(n=2)とした。末梢血を2Na-EDTA処理後、2000回転10分間遠心し上清を分取した。この上清中のG-CSFを測定した。測定にはキリンビール株式会社の協力を得て、モノクローナル抗体を1次抗体、 β ガラクトシダーゼで標識したポリクローナル抗体(Fab')を2次抗体としたサンドイッチELISA法にて行なった。intraassay 3.6%, interassay 10.2%であり、健常人57名の平均は 10.5 ± 4.5 pg/mlであった。

〔成績〕妊娠初期におけるG-CSF値は 18.72 ± 5.64 pg/ml(7.8~29.5)であったのに対し、妊娠後期では 29.81 ± 6.78 pg/ml(19.5~43.1)($p < 0.01$)で両者間に有意差を認めた。人工妊娠中絶前後でみると前が16.4, 15.1, 19.5pg/mlで、後はそれぞれ11.9, 11.7, 16.2pg/mlと低下した。また胞状奇胎娩出前では93.9, 103.8pg/mlと高値であり、娩出1週間後にはそれぞれ39.5, 15.7pg/ml, 2週間後には8.2, 3.7pg/mlに低下した。

〔結論〕妊娠初期、後期と伴にG-CSF値は上昇しており妊婦の白血球増加との関連が示唆された。また胞状奇胎で高値を示すことは興味深い所見であり、G-CSFの異常妊娠における多面的な存在意義を窺わせるものである。